

子宮がん検診（車検診）

動 向

検診車による子宮がん検診は、昭和43年度から県の委託事業として開始され、昭和47年度から横浜市より委託が開始された。昭和58年度からは老人保健法施行に伴い実施主体が市町村に移行し現在に至っている。

車検診は、県下市町村からの依頼を受けて神奈川県予防医学協会が検診車を配車し、県下の5大学（北里大学、東海大学、横浜市立大学、聖マリアンナ医科大学ならびに日本医科大学武蔵小杉病院）の産婦人科医師が担当している。採取された細胞標本は当協会の細胞診センターで診断し、検査センターを通して検診結果の報告業務を行っている。

二次・精密検診は、原則として、担当5大学病院でなされ、一次検診での要再検・精検者を有効に二次・精密検診に誘導出来ているのが特徴である。

精度管理として、当協会情報処理部での集計を基に、協力5大学と県立がんセンターの婦人科腫瘍専門医ならびに協会細胞診専門医からなる「子宮がん車検診実施検討会」で検証している。すなわち、一次と二次・精密検診担当者からなる「検討会」でもあるので、十分な精度管理がなされていると自負している。

また、県産婦人科医会役員ならびに上記大学や県立がんセンターの代表医師に「車検診報告会」を実施している。子宮がん検診の実施と精度管理のモデル事業としての役割も担っていよう。これまでの車検診の実績は200万例を凌駕しており、我が国ばかりでなく海外でも報告され、子宮がん検診の普及と精度管理に貢献している。

なお、年度途中から、新しい検診車が導入された。検診受診者にとって、受診環境とプライバシーの向上が図られている。

子宮頸がん検診結果

2008（平成20）年度の車集検受診者の総数は21,087名で、昨年度の実績より970名増で、僅かながら3年度連続の増加傾向を示した。受診間隔が2年に1度に変更された影響が本年度も懸念されていたが、関係各位の熱意のお陰であろう。また、検診開始年齢が20歳に引き下げられ、若年者の受診が加わったせいもあろう。年齢階級別では、やはり60歳代が最も多く、50歳代、30歳代の順で、従来と変わらない。期待された30歳未満の受診者は563名、2.7%で、一昨年の4.3%を下回ったが、50歳未満の若年層の受診者は昨年と変わらない36.4%を占めていた。初診受診者（6,732名）率は31.9%で、昨年より2.2%上回った。うち若年者の割合は30歳未満6.7%、30歳代29.4%だった。

細胞診クラス分類では、細胞診クラスIIIa以上の要精検者は78名（0.37%）、クラスII要再検者は128名（0.61%）だった。両者合わせた要再検・精検率は0.98%で昨年の0.74%、一昨年の0.63%より高かった。再・精検実施率は平成21年8月末の時点で88.35%、うち精検者92.31%、再検者85.94%だった。

発見癌のうち頸癌は13例（上皮内癌9例、Ia期癌2例、Ib期以上2例）で、早期癌が84.62%を占め昨年度より高値だった。頸癌発見率は0.06%と昨年に比べ、低かった。初診者からの頸がん発見率は0.15%と高く、一方、再診者のそれは0.02%と低かった。要再検群からの2例を除いて11例は要精検群から発

見されている。年齢階級別では、本年度は30歳未満では癌は発見されなかった。30歳代0.11%、40歳代と50歳代ともに0.03%で、60歳代で0.06%と高く、70歳以上では0.04%だった。初診者の多い30-49歳の若年者で高い頸がん発見率を示した。

発見された異形成は44例（軽度21例、中等度14例、高度9例）で、異形成発見率は0.21%である。年齢階級別では、30歳未満0.89%、30歳代0.47%、40歳代0.37%、と比較的若年者に多く、高年者では50歳代0.08%、60歳代0.07%、70歳以上0.04%と低かった。初診者からでは、異形成の発見率は0.37%と一層高く、年齢階級別では30歳未満0.67%、30歳代0.56%、40歳代0.59%を示し、比較的若年初診者に高かった。しかし、再診受診者からも、異形成は0.13%の高頻度で発見されている。

細胞診クラスII再検は協会の特異的な分類であるが、再検受診者110名から11例（発見率0.05%）の異形成（軽度8例、中等度3例）、またIa期、Ib期癌も各1例（発見率0.01%）発見されている。

子宮頸癌以外の癌では、体癌が1例発見されている。

評 価

以上、本年度に実施された検診は、適正に処理された実績を示した。

平成16年から子宮がん検診が見直され、20歳以上の婦人に2年毎に実施されるシステムとなった。また、横浜市での車集検が中止された。このような変動期にあって、一昨年度まで車集検の受診者が激減したが、本年度の実績は一昨年度に比べ2年連続で僅かながら増加傾向を示した。しかし、一昨年度に20歳代の受診者が初診者の中で13%を占めていたのに比べ、本年度は2.7%に止まった。20、30歳代の若年者では異形成や頸癌の発見率が高いところから、若年者の子宮がん検診受診が一層勧奨される。今後、若年者の子宮がん検診受診の意識が車集検を通じて涵養されること、さらには他の検診システムも含めて若年者の検診が広く普及することを期待したい。

子宮頸癌ならびに異形成の発見率は初めての検診受診者（初診者）に高いことはこれまでの統計通りであり、未受診者への受診勧奨に一層努めたい。一方、検診受診経験者（再診者）での癌発見率は著しく低下するものの、異形成の発見率は0.1%以上の高率を示していることから、再診者へも定期的な検診受診の継続が勧奨される。

平成19年にがん基本法が施行され、がん検診精度管理の重要性が指摘されている。本車集検での年次集計は、子宮がん検診の精度管理の先駆けとなろう。また、がん検診受診率50%の目標も掲げられた。来年度は20歳から40歳まで5歳刻みの年齢層に子宮がん検診無料クーポン券が配布される。子宮がん検診の普及のきっかけになれば、と期待される。車集検でも、一層充実した活動を行って行きたい。

細胞診報告様式が、来年度（平成21年度）から、ベセスダシステム準用の日本産婦人科医会分類に改訂された。車検診でも本医会分類に則って報告するよう、精度管理検討委員会ならびに協会細胞診センターで検討が重ねられている。車検診の精度に障害とならないよう、スムーズな移行に努めたい。

関係の集計表は90頁に掲載